

平和の責任

沖縄県立開邦高等学校一年 仲松 蒼

あの日から、七十九年。今も沖縄の心に暗い影を落とす「それ」が六月の二十三日に終わってから、たったの七十九年である。

私が物心ついた頃から、祖母はよく戦争の話をしてくれた。私の手を強く握り締めながら、声を振り絞り語るのだ。祖母の語るマリアだとか防空壕だとかそんなものは、幼い私にとっては聞き覚えのない、不気味な言葉でしかない。まるでスプラッター映画や小説のようで、余りにも狂気じみている。いつも着飾り舞踊を嗜むような祖母が、なぜ私に今更そんな話をするのかと不思議で仕方がなかった。そしてそのあと決まって私は、顔もよく知らぬ祖父の仏壇に手を合わせた。

この時から、私はやたらと戦争の話避けようになつたと思う。学校の平和学習も、所詮は対岸の火事だとも言うような態度でやり過ぎ、沖縄の所々に残るガマや負の遺産からは目を背け続けた。戦争について知れば知るほど、人として生きることの罪を背負うような、そんな気がするのだ。私が義務教育を終えようとする頃には、祖母はもう以前のように話ができなくなった。結局最後まで、祖母の話をもとに覚えてはいなかった。これまで散々繰り返されてきた歴史を学んで、無知であることがどんなに恐ろしいことかは分かつていたはずなのに、私は知ろうとさえしなかったのだ。そして私はまたもや知らなかった。祖父がシベリア抑留から生還して、人が人として扱われなかった生き地獄を誤魔化すように酒に溺れたことも、衛生兵として多くの遺体を解剖したことも、祖父母が住んでいた地域は、かつて戦時中人と人が折り重なるようにして死んでいった「死の十字路」だということも、ただ平和に甘えて「知る」という責任から逃げ続けていただけなのである。

そこから私は、このままだ話を聞いているだけではいけないと、初めて「平和の礎」へと足を運んだ。今まで、「いしじ」という読み方

が方言であることさえ知らなかった。平和の広場を太平洋に向かって囲むように、静かに佇む礎が、戦没者の多さを物語っている。無人の検索機からは無機質な機械音声だけが響き渡って、礎に刻まれた名前のいくつかは掠れてほとんど読み取れなくなっていた。ここにある二十四万という人々の生きた証を、真昼のてっぺんに登った太陽がガラガラと照りつけている。その日はひどく良い天気で、それがより一層、平和に生きる私たちの無力さを感じさせた。

「戦争」という行為が、今までいい様に世界に働きかけたことがあったのだろうか。「領土を広げたい」「相手が気に食わない」などと、自分たちの目先の利益ばかりを追いかけては金と命を無駄にするのに、それが平和の実現のための犠牲になどなりはしない。我々はなぜ言語と理性を以ってしても、争いにばかり走ってしまうのだろうか。平和を嫌うものなどが何処にしようか。私たちが今行うべきことは、過去に学び、互いを尊重し合うことではないか。顔の見えない相手を頭ごなしに批判したり、よく知りもしないことを語るなんてのもってのほかだ。人種や性別なんかで差別が起こるのも、自分たちの視点からでしか物事を考えることができず、こちらからは見えない相手の苦悩や意見だとかは全く聞きいれていないからである。戦時中に言論統制や一種の洗脳教育が行われるのは、そうやって追い詰めて人間の愚かな部分を利用するからだ。戦争というのは人を残酷にする。自分が今歩いているこの地が、街中の木々に隠れる洞穴が、かつて人々の血と憎しみで塗られていたなんて、一体誰が想像できるのだろうか。

直接経験者から話を聞くことができた私でさえ、戦争について深く理解することはできていない。段々と語り手も亡くなっていく中、これから私たちが語り継いでいかなければどうなってしまうのか、想像は容易いはずだ。もうこれ以上犠牲者を増やしてはならないと、思い出すのも酷であるう経験を語ってくれた方々の意思を無駄にしてはならない。戦争のない沖縄に生まれ平和を感じているからこそ、戦争について知り、託された想いを繋いでいく必要があるのだ。未だに世界では争いが絶えず、悲劇が繰り返されている。「知る」ということが第一歩ならば、そこから考え、お互いのことを理解、尊重し合えるはずだ。先走って武力を行使するのではなく、相手を傷つけるようなことはしないだとか感謝を忘れないだとか、そんな当たり前のことを積み重ねていくことが争いをなくす一番の近道であると、私は信じている。